もう一つのインカレ「全国公」

狩野　裕
1981 年大阪大学卒業

全国国公立大学卓球大会（全国公）は「もう一つのインカレ」と呼ばれているらしい[i]。2022 年夏、そのもう一つのインカレの第 62 回大会が、大阪大学を主管校としてグリーンアリーナ神戸で開催された。参加者 1400 名を超える「学生の、学生による、学生のための大会」の運営は重責であり、60 回（第 60 回大会と第 61 回大会はコロナで中止）もよく続いてきたと感心する。筆者が現役のころは筑波大学の倉木先生がお手伝いをしてくださっていたと記憶するが、最近は、1997 年に設置（改称）された国公立大学卓球連盟のサポートが大きい。その理事長が、筆者より 1 学年上級で京都大学卓球部 OB の長内進さんである。長内さんの卓球を愛する心はプレイに止まらない。毎夏お盆の頃に開催される全国公では大会期間中ずっと体育館に詰め大会の進行を見守る（写真1）（お盆時には家族サービスもあると思うが「家族は諦めているよ」とのこと。）。毎回、大会期間中に主管校の OB・OG と会合を持ち旧交を温める機会を作る。同連盟のWebにある「交流広場」の寄稿文に登場した OB・OG には、その旨連絡し読んでいただくなど、細かい配慮には頭が下がる。

さて、当時の大阪大学卓球部について語ろう。日本人は悲観的なのか筆者がそうなのか、どうも負け試合の記憶が強いのである。1979 年夏、第 19 回の全国公が九州大学で開催された。大阪大学は四単一複 3 点先取で行われる団体戦には自信があった。実際、本大会の直前に開催されたインカレ（全日本大学総合卓球選手権大会、こちらがオリジナルのインカレ）では二年前に続きベスト 16 まで進出している。決勝トーナメント一回戦では当時関西リーグの一部校であった大商大に3―0で完勝してのベスト 16 入りであった。さて全国公である。大阪大学は予選リーグで広島大学に苦戦するも順調に勝ち上がり、意気揚々と決勝トーナメントの組合せ抽選に臨んだ。抽選は私がやると立候補し本部席へ向かった狩野は天を仰いだ。私が引いた札は優勝候補最右翼である筑波大学のパッキンだった。当時の（今も？）筑波大学は強豪選手をそろえての出場で、エースの大橋選手はシングルスと井上選手と組んだダブルスの両方で関東学生のランカー（ベスト8）であり、若沢選手は当時 1 回生で前年のインターハイダブルスチャンピオンであった。気を取り直し決勝トーナメントに臨んだ大阪大学は一回戦で福井大学を下した。つづく筑波大学戦はまさに激戦であった。結局敗退するのだが、5セット連続で先取し、あと1セットで筑波大学を負かすところまで同大学を追い詰めたものの、その後6セット連続で取られてしまうのである。

狩野には、ここで卓球人生最大の後悔がある。ダブルスの2セット目、イージーボールが上がり狩野はスマッシュを打った。いつもは対戦相手の体を狙ってシュート気味のスマッシュを打つのであるが（殆ど 100%決まる）、そのとき、なぜか相手の逆を突きバックストレートへ軽いスマッシュを打ってしまったのである。逆を突いたものの威力がなかったため、その軽打をフォアクロスへカウンターされてしまった。要するに極めて重要な場面で狩野は余裕を見せ遊んだのである。パートナーの加島さんに謝ったものの後の祭り。試合の流れが大きく筑波大学に傾き、勝利の女神を逃してしまった。全国公といえば思い出す本当に苦く苦しい思い出である。その後、筑波大学は順当に勝ち上がり、大阪大学以外に対しては失点せずほとんど完璧のゲームを展開し優勝する。武田秀人さんの寄稿文（第 14 回）にあるように第 17 回大会

大阪大学			筑波大学
T	狩野	2－0	井上
2	古川	2－0	安重
W	加島 狩野	1－2	井上 大橋
4	加島	0－2	若沢
L	河原	0－2	大橋

で岡山大学が優勝した翌年から、筑波大学は優勝を重ねていくのである。

本稿で特に触れておきたいのは一年上級の主将だったカットマンの加島信隆さんである。とにかく粘り強い卓球をする。1979 年の全国公予選リーグの広島大戦でも、2対2となったラストでの第3セット，終盤で大逆転し貴重な勝利を収めた。人的な魅力にあふれ、後輩から慕われ、先輩・同輩からの信望も大変厚い先輩だった。学外にも多くの卓球仲間がいた（写真2）。北大の石田選手と京大の長内選手そして加島さんの3人はモンキーズと云われていたことを覚えている方もおられるだろう。狩野は加島さんとダブルスを組み全国公で2年連続3位になった。その彼が社内の事故で急逝なさったのが 1999 年のことであった(享年 42 歳)。ご存命であれば、長内さんと一緒に本卓球連盟を支えてくださったことは間違いない。もう一人は，当時副主将であった同期の古川秀範くん（表ソフトのペン攻撃型）である。先に述べたように大阪大学は 1979 年のインカレでベスト 16 に入った。ベスト 8 入りでは早稲田大学に敗退するのであるが、古川君は全日本学生選手権シングルスランカー（ベスト 16）の佐藤選手の（ジェット)ドライブをたたいて早大から一点をもぎ取った。そして、その後、翌年の5月に引退するまで団体戦に全勝するのである。上述の筑波大学戦でも安重選手にドライブを引かせず完勝した。

私たちは4回生の5月に、二部残留を決めた春季リーグ戦を最後に引退した。狩野は大学院に進み、いくつかの大学で教員を務め、1997 年に大阪大学に戻り、2007 年 4 月から大阪大学卓球部の顧問（部長）を務めている。18 歳から 4 年間真剣に汗を流した卓球部を卒業して 4 半世紀。その顧問を務めることができるとはなんと幸せなことか。その巡りあわせに感謝している。ただ、昨今の大学は忙しくボールを打つ時間的余裕はなく、年に一度新入部員の歓迎会で自己紹介する程度に止まっていることは残念でしかたがない。顧問の活動として一つ挙げるとすれば、大阪大学内に正式の寄付窓口「体育会卓球部支援事業」を開設し、OB・OG が現役部員を支援するための安定した仕組みを作ったことぐらいであろうか。寄付者には税の寄付控除が適用される。やや変わった人的交流として、東北大学で活躍した狩野と同年代の西谷選手の長女が 2008 年に阪大卓球部に入部し活躍してくれたことを思い出す。また、2005 年のことだと思うが、北海道大学から講義を依頼され伺うと学部長室に招かれた。学部長の弁和順(ゆはずかずより)さんは狩野と同年代で北大卓球部に在籍、2005 年当時北大卓球部部長も兼ねておられた。狩野を覚えてくれていて卓球談議に花が咲いた。

70 年を超える阪大卓球部の歴史に残る事柄としては、1986 年の関西学生春季リーグ戦における 1 部昇格がある。こちらについては直接の関係者の寄稿を待ちたい。

国公立大学卓球連盟の活動は全国公の開催だけでなく、海外遠征、卓球研修会、国公立 OB・OG 卓球大会など多岐にわたる。二十歳前後の多感な時代に卓球というスポーツを通して得た交流資源が人的ネットワークのハブの役割を果たす。自大学の卓球部関係者に加えて同連盟の活動によりそれが全国に広がる。こういった恵まれた環境の下、人生 100 年時代を有意義に生きていきたい。

終わり

写真1： 2022 年夏の「全国公」開会式。左から、3名の現役選手、長内理事長、審判長、筆者、西尾大阪大学総長。

写真2： 1979 年全国国公立大学卓球大会でのスナップ。前列でしゃがんでいるのが加島さん。後列左から山口氏（大阪市大）、大橋氏（筑波大）、中本氏（神戸大）、入尾氏と中村氏（大阪市大）。他大学選手との交流がみてとれる（入尾氏提供、『加島信隆』追想集より）。

---

[i] https://rallys.online/topic/domestic/20220816-zenkokukou/